

特別出品 野川随想

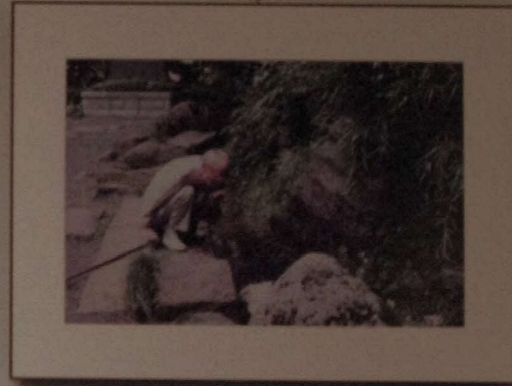
銅山 英次



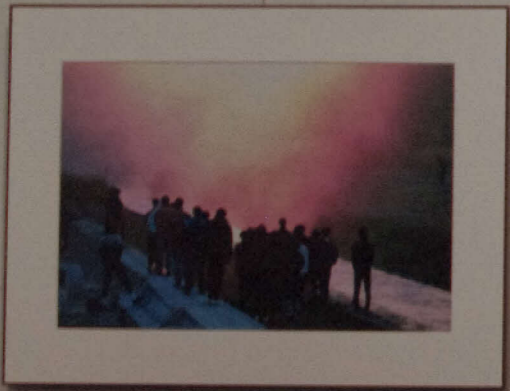
空を映す野川



瀑布の勢



野川の石



野川の夕焼け



野川の桜



野川の花



三國大分下  
野川の夕焼け

野川の夕焼け  
野川の夕焼け

野川の夕焼け  
野川の夕焼け



## 野川のこと —— 鰐山英次

そのころ私は福井市から32キロ離れた越前岬の海岸近くに住んでいた。子供の頃はよく絵を描いていた。ある日絵をほめてくれた東京から来たおじさんがカメラを持っていた。その時から私は写真を教わった。

小学生ながら殆どのものが撮れるようになっていた。近所に福井工業大学の写真のリーダーが下宿した。その人と関わるうちに「自分でどンドン撮れ！」と言われ、私はいつもカメラを握っていた。

戦後文部省の学制が6・3・3制に変わったとき、新聞に“早稲田高等学院の生徒募集450名”の広告が出た。受験し合格し上京した。

昭和25年、大岡昇平の「武蔵野夫人」が出てたちまちベストセラーになり映画化された。映画の舞台となった野川が深く印象に残り、何回も現地を訪ねてみた。しかし描いていた風景とは違っていた。当時深川に下宿していたが、小金井に居を構え、とことん野川を見つめてみようと決心した。

“TAMAらいふ21”が多摩東京移管100周年記念事業として、新時代の創造をテーマに開催された。その中に多摩の湧水研究会があり、参加した。八王子から多摩地域を隈なく見て歩いた。そして見事な湧水に出会った、それが落合川(東久留米市)である。

夏の朝4時半、毎日そこに行ってから出社していた。ある日駐車しているとき神主につかまってしまった。氷川神社の栗原神主だった。事情を話すと「武蔵野夫人の映画を観たのか！」と驚いた様子だった。それから、社務所に案内され、映画撮影の時、衣裳部屋として使ったこと、主役の田中絹代が着物をかけたところ、女優さんのトイレはどこそこだった等々、ダイナミックな川の情景が頭の中で広がっていった。

実は小説の舞台になっている野川は、映画では落合川であった。このことを巡っては原作者の大岡氏と映画演出に携わっていた福田恒存氏との論争もあった。福田は映画のためにと野川より落合川を選んでゆずらなかった。

これをきっかけにして、ただの原っぱだった市が一変し、東久留米市は脚光を浴びる。多摩湧水の会には東久留米市民も多く、ついに富士山の見える町として駅舎屋上を市民に開放した。徐々に水に対する関心と認識も変わり、市民運動で川もきれいになっていった。

大岡さんと何回か話を交わすうちに、「野川を訪ねてみませんか？」とお誘いしたことがある。昭和63年の1月のことである。

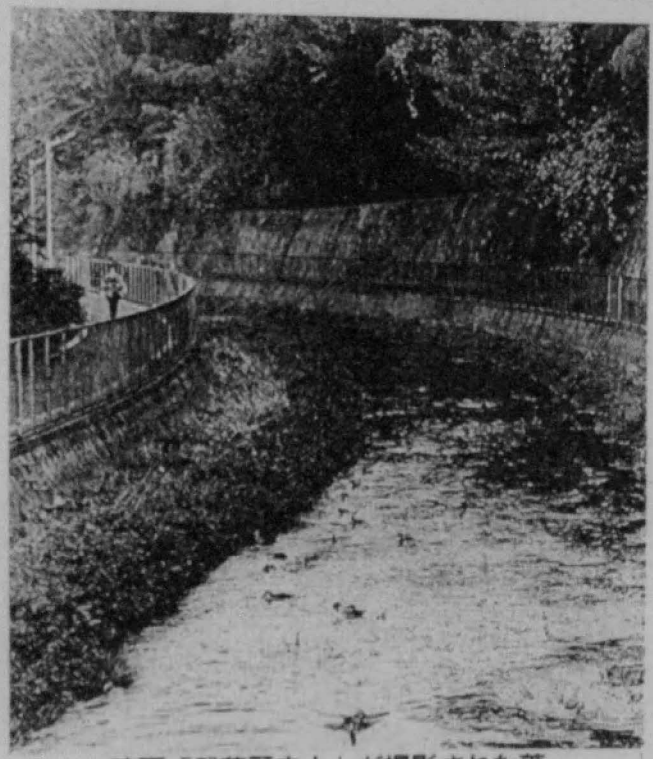
氏はのちにエッセイで「野川は私の青春と共にあった」と記している。野川について思い出は沢山あるが、忘れがたい一つである。

昭和二十六年に公開された田中絹代主演映画「武蔵野夫人」(東宝)。野川や恋ヶ窪など武蔵野の自然を舞台とした恋愛物語だが、これまでクローズアップされなかった場所がある。湧水(ゆうすい)を水脈にもち、今でも武蔵野の面影をこどもる東久留米市の落合川。映画の設定は野川だが、撮影ロケはこの川で。突き止めた市民団体は二十七日午後一時から、同市中央公民館(市中央町二)で上映会を開く。

# 落合川に自然呼び戻そう

## きょう「武蔵野夫人」上映会

# 映画に残る昭和30年代がイメージ



映画「武蔵野夫人」が撮影された落合川のロケ現場＝東久留米市内で

撮影秘話「突き止めたのは「落合川水辺の会」(菅谷輝美代表)。同川では現在、コンクリート護岸の一部を再改修し、武蔵野の面影を取り戻そうという「いこいの水辺」整備計画を都が準備中。  
「水辺の会」は今年七月、計画に地元の声を反映させるため、同川の自然保護団体「ホテルを呼びもどす会」や「ほとけどじょうを守る会」などが集まって結成。検討を重ね、すでに再改修のイメージ図を作製している。

### 東久留米市中央公民館

イメージ図をつくる際、う」と調査を開始。会員が理想としたのは昭和三十年代の川の姿。菅谷代岡昇平原作、溝口健二監督表は「三十九年の東京オリ」が始まり、東京は都市化が進んだ。いま生きている人の記憶に、一番強く残っている武蔵野の自然は三十年代のものだろう」と話す。計画が進む中、南沢三の氷川神社宮司、栗原正浩さんへの「田中絹代がバラソルを持って川岸を歩いている場面を撮影していた」という話が注目された。「もしそういう映画があるものだったのか、参考に

なら見てみたい。当時の川はどんな感じだったのだから



# 湧水ふたたび

63. 7. 20

## 「野川」を遡る

大岡昇平

「野川」の水をさたれている。拙作「武蔵野夫 小金井に住む人」と書き、  
れいにしようという努力が治人は、昭和十五年の出版「野川を、源流を遡って、国分  
産各地のグループによって得、もう三十八年前になる。寺町の産ヶ窪まで遡る（さかの  
らせた。そこでヒロイン 書いた。それは寺でも、国分  
が恋を覚悟する、というロマ 寺から小金井、三鷹天文台、  
ンチックな件掛けたが、 深大寺に到着（かけ）の処  
いまはこんな恋覚悟はもたら 々に、数は減りながら残って  
い。古き昔の小金井から いるという。

### 同級生の家に 寄宿しての縁

野川の源流、岸に縁が 野川のかげり野川とかかわ  
りかできたのは、昭和十三  
年、成城学園の同級生、草永  
次郎の、今の中  
町二丁目十三番  
地の崖下道に臨  
んだ家に、十カ  
月ばかり寄寓  
（きやく）させ  
て貰（もら）っ  
た縁である。是  
政談のカードを  
くへって、南側  
は一棟のナラな  
どの疎林で、林  
の奥深く歩いて  
行くと、海の沖  
へ出て行くよう  
な気持ちにな  
る、と通いた。  
東園の方、その  
後、国際基督教  
大学、ゴルフ  
場、野川公園と



三鷹天文台下  
の湧水を初め  
て訪れた大岡  
昇平さん

## 三鷹天文台下

移行した方は、もと中島飛行 野蕨ならを洗っていた。この  
機工場の敷地で、掘取されて 水は冬は氷層は少なく、枯れ  
いた。鉢（さ）びたトラクタ ることがあるという。  
「が放浪されていたりした。 昭和二十三年には、野川は  
従って、天文台、深大寺の この辺では水脈の多い農薬用  
方向へは足を延ばせなかつ 氷という感じだった。草永次  
た。こんど、東京新聞記者に 郎の長男一矢君にきくと、子  
連れられて、初めて天文台下 供たちは「大川」といってい  
の湧水を見に行つた。  
中町には中村研一調伯の家 大坂の流川も、河口近くは大  
があつて、水が湧き、「出 川」という。奇妙な一致だが、  
水」（でみず）となつて階傍 野川は「大川」の感じはない。  
に溜（たまり）、近所の人 がしかし国分寺産ヶ窪から湧水も  
の他を頼めた主婦ではある。

### 貫井神社裏が 最も湧出豊富

「野の中を流れる川」の印 象がするの、小金井駅から  
多磨敷地へ下る道から上（か 七十九歳、この自然と持さら  
み）である。貫井神社の社殿 人の死廟の近づいたしるし  
うらの湧水が最も豊富で、道 は、土いりを始めることだ  
を隔ててかなり大きな池があ ぞうだが、私は土の肉いのす  
り、餅（もち）を網（か）つていて、 る水を汲んだことになる。  
料車もあつたと思つて、い は、足利の東の疎林深く入っ  
うのは、記憶が確かでないか て、海の沖に出る感嘆を味わ  
ら、当時は金がなからで、 ったのは、六十年前の大正十  
やたら歩いていただけだ。 五年、草永家がここに引つ越  
た。地図によると野川の水脈 し、船まりに来たころのこと  
は、国分寺の国分線路の向こ だった、と思ひ出した。その  
う側にあるのを知っていたの ころ私は十七歳、わが寄宿は  
で、ひたすら野川べりの道を 「野川」と兵にあらったのだ。  
念いだ。

(作家)

ほのかに土の  
臭いがする水

樹の根元の白の菌から湧い  
ているのだが、四十年前に  
来てみるとあたりの配石、敷  
石もとどろいて、昔の野蕨は  
失われているようであった。  
水はきれいだった。思わ  
ず、水辺にしゃがみ、手でし  
やくって飲んだ。東京の水道  
の自來水よりうまい。ほのか  
に土の匂いがした。  
四十年前にも飲んだろう

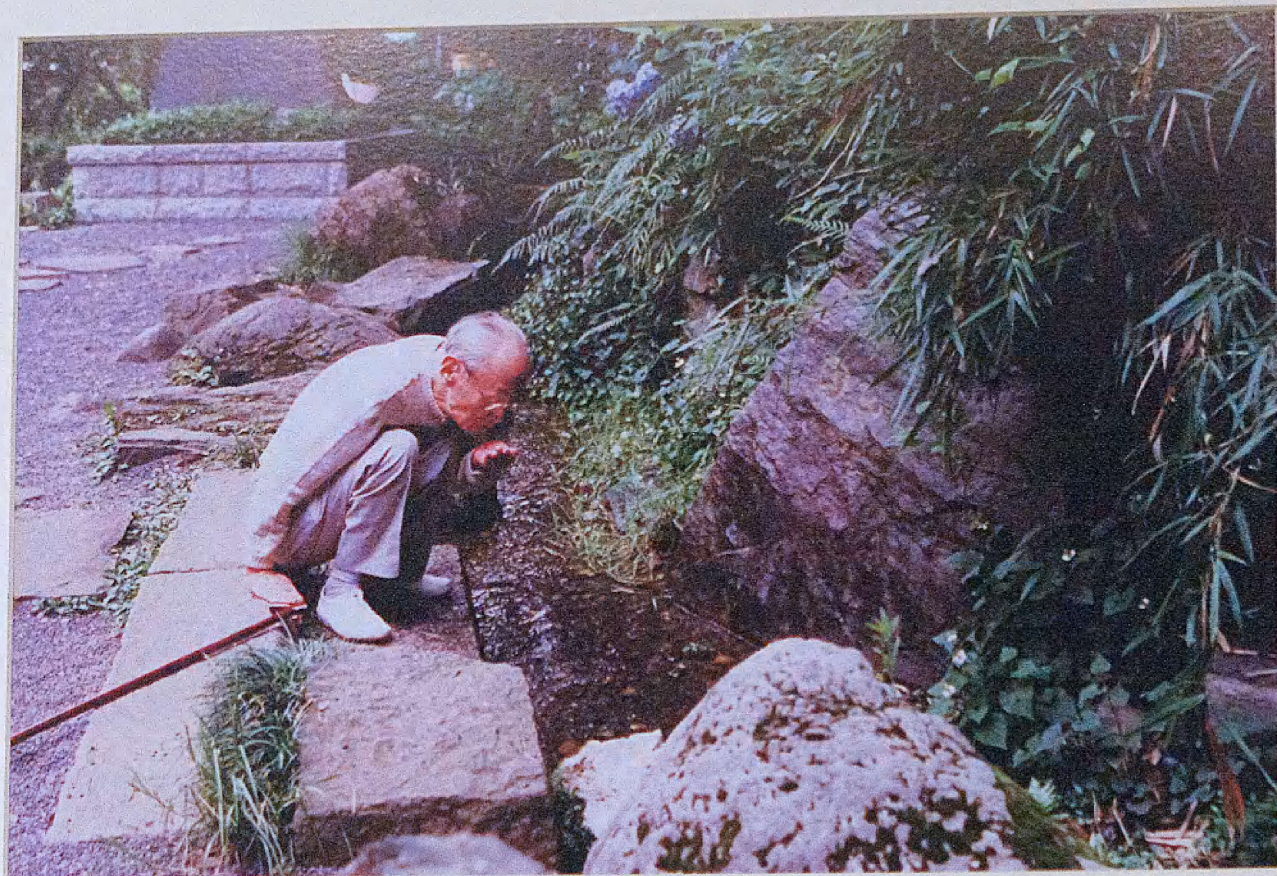


鏑山 英次



湧水の妙





貫井弁天

(土の匂いがする)と、ごくごく水を飲む  
大隈良平)





霧の中で初日の出を待つ





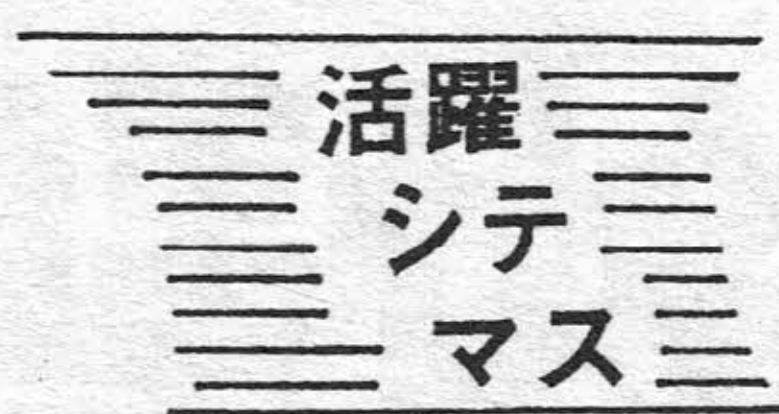
雪の木





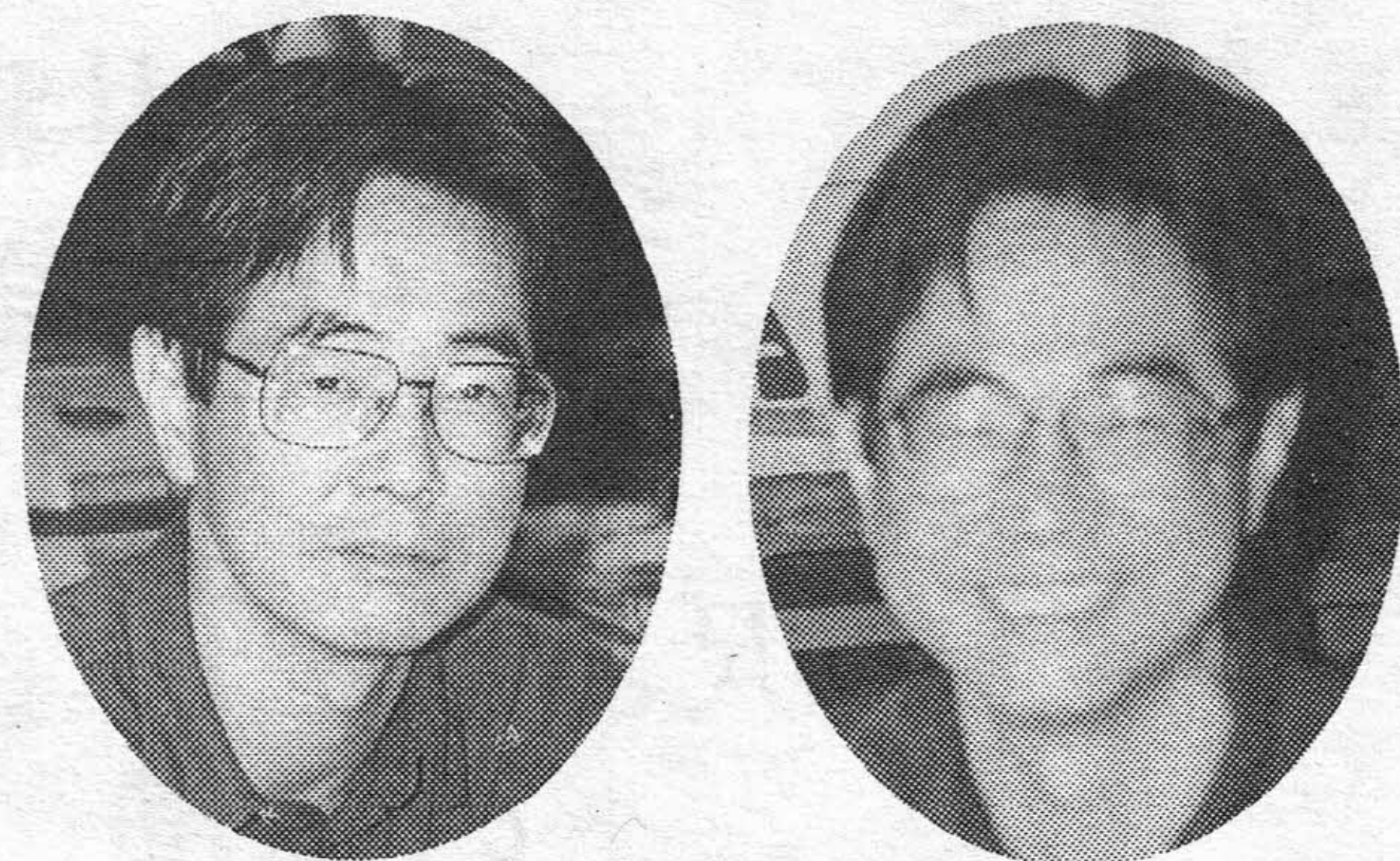
花とカワセミ





## 「小金井木彫りの会」主宰 “無心”

地域文化が云々される昨今、小金井市では「小金井木彫りの会」が意気盛ん。その指導に当るのが増田章夫氏。七年前、福祉会館のボランティア活動で、障害者に彫刻を教えたのが始まりで、今や会員65名。大仏師である父上芳光氏も講師となり、仏像彫刻を中心とした木彫りを楽しむ。新聞テレビの取材にもお忙しい中、氏の仕事場（貫井北町）を訪ねた。



### 《型にはまらない生き方を選ぶ》

稲門の仏師がどうして出現したか興味があった。章夫氏は英文科卒後、二年間広告代理店で営業を担当、それなりに面白かったというが、ふとこのままではと脱サラ、最も身近だった父上の門をくぐる。それまでは刀を握ったこともなかった。大学一年の時、授業料値上げ闘争があり、バリケード封鎖なども体験、体制批判・学生自治・価値の創造といった問題に強く目覚めた世代でもある。家庭もきわめて自由な雰囲気だったから、型にはめられるのがいやだったのだろうと言う。自然

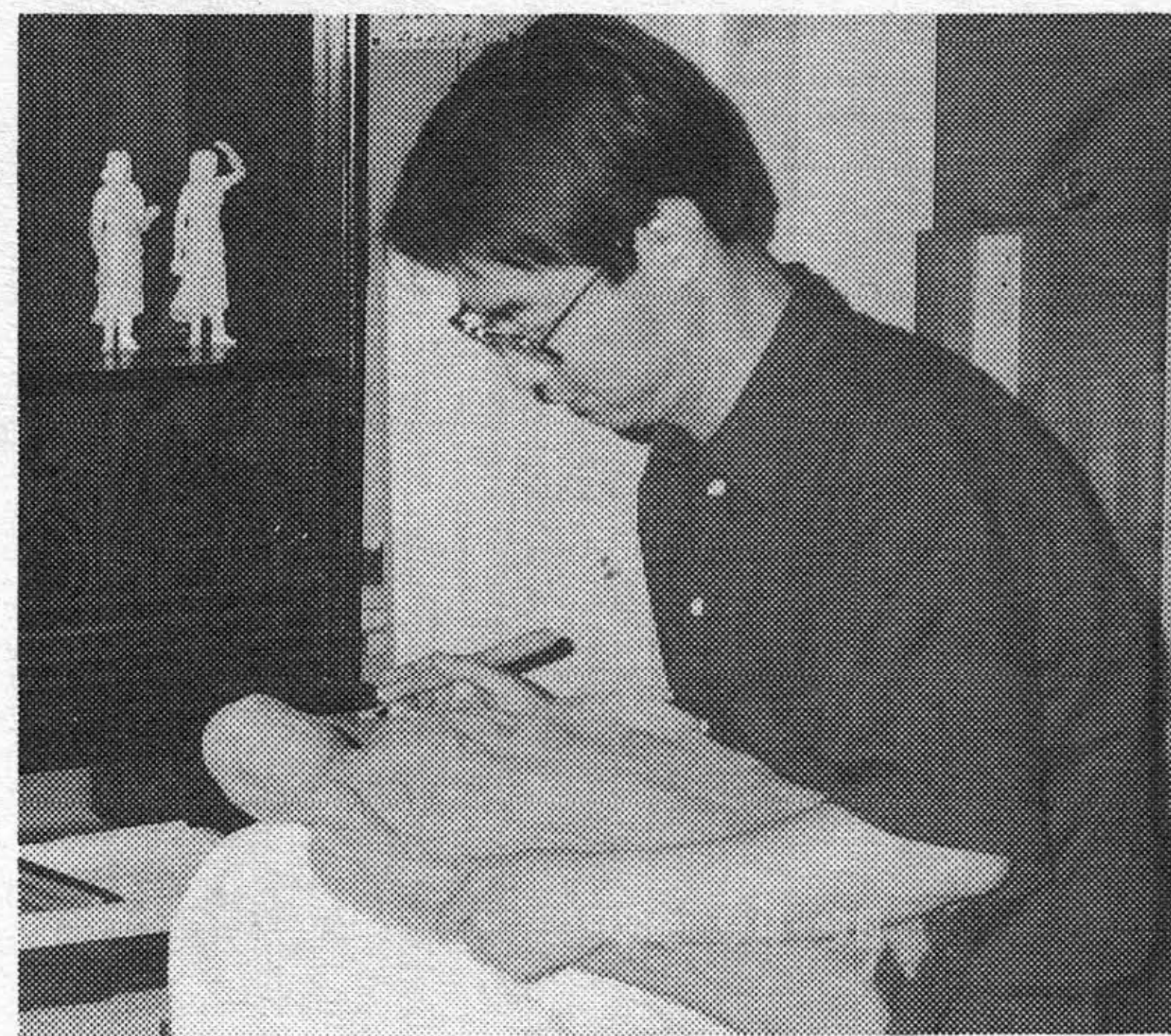
に自由な生き方を選んでいく素地があったようである。

### 《手には水掻きが》

仏像が出現したのは、釈迦没後三百年頃（紀元前1C）。弟子達が遺徳を偲び、その生涯（仏伝）を遺骨を納めた塔のまわりに表したのが初まりとのこと。日本へは中国、朝鮮半島をへて経典と共に伝来（6C頃）。奈良・平安期に造営が盛んとなり、日本の様式が完成、造形的には鎌倉時代に頂点に達した。

仏像（如来像）には、我々常人とは異なる特徴が大きくは三十二、細かく言えば八十あ

## 仏師 増田 章夫(一文S44) になること



るという（三十二相八十種好）。例えば、手は膝より下になるほど長く、水掻きのような●のがある。それは衆生に向って救いの手をのばし、水ももらさず救い上げるとの意味だそう。

### 《一刀一刀が真剣勝負》

伺った時、三カ月程かけているという作品を見せて頂いたが、磨いてないと聞き驚いた。実につややかで、なめらかな木地なのである。しかも一刀一刀やり直しはきかないとのこと。これは、角材の中にひそむ仏の姿を最高の形

（極めた形）で取り出す作業のようだ。

一刀が刻む線が、最初で最後の彫りとなる真剣勝負の世界、完成までに、小品で一カ月以上はかかるという。その間の集中力と緊張感は想像を絶する。そうした時空間を通して自から「無心」の境地が生まれるのであろう。仏像に「俗」が写らない所以。

### 《形式・典型を破ることは》

破格に向かう衝動もあるが、それでいくともはや仏の姿ではなくなり、人間(=俗)になってしまう。ただ、仏の相、特に目は自分に近い人に似るようだし、作者の個性(人間性)が作品に現れることは確か。

なるほど、人間であって人間でない間(はざま)の世界なのだ、気づかされた。

ふと異次元の人に対峙しているような妙な気もした。仏像や角材の並ぶ静かな部屋に、御母堂のお持ち下さったお茶がまた、格別においしいひとときであった。

(増田さんと同期卒の国分記)



